

30. A Multidisciplinary Team Approach

獨協医科大学

医学部5年 朝倉真希, 菅野靖幸, 久野木康仁,
櫻本浩隆, 鈴木美真理, 知野 諭,
藤木貴顕, 茂木麻実, 百瀬理恵

医学部: 安藤千春

基本医学 (語学教育部門): 水口 学

【目的】University of California, San Diego (UCSD) とその関連病院の見学, カンファレンスへの参加や講義を通して米国における医療制度の特徴, 並びに緩和ケアの現状を学ぶ。

【方法】実際に現地に伺い上記の病院を見学し, 終末期医療に関して, チーム医療を担う医師, 理学療法士, ソーシャルワーカー, 作業療法士, 臨床心理士, 技師装具士などの職種の方々からご講義を頂いた。

【結果及び考察】見学させて頂いたカンファレンスには医師以外にも様々な職種の方が参加されており, 我が国の医療現場では見られない光景に驚いた。日本においても多職種間で情報を共有し, 意見を述べられる環境が必要ではないだろうか。

米国には日本と違い国民皆保険制度は無い。そのため貧富の差により受けられる医療に差があり, 深刻な事態に陥るまで医療が受けられない人々も大勢いる。米国には65歳以上が対象の Medicare, 低所得者及び身体障害者が対象の Medicaid, さらにカリフォルニア州には独自の Medical という公的医療保険制度が存在するが, 特に中間所得者層に対する保証制度は無いため, 患者の社会的, 経済的背景を考慮し医療を提供することが米国では必須であることが分かった。

またサンディエゴホスピスでは, 患者がいかにリラックスして過ごせるかを重視しているように感じられ, 他にも院内に教会を設置したり面談室を設けるといった患者の喜びや苦しみを家族や医師だけでなくチーム皆で共有しようとする工夫が見られた。

【結論】米国における緩和ケアは, 患者だけでなく家族を含めたケアであり, 痛みを抑えると共に, 患者やその家族の心理面をサポートする体制が充実しており, それぞれの患者の QOL を考えて提供されていた。また米国では経済的背景や保険制度により受けることができる医療に格差が存在している問題はあるが, 医療従事者が職業の垣根なく意見を言い合い, チームとして患者と家族に向き合う姿勢の重要性を実感することができ, その姿勢は我々も見習うべきだと思った。

31. Patient-Centered Philosophy

獨協医科大学

医学部5年 永井幸司郎, 鎌田 渉, 金子ゆき,
山口智己, 四倉 玲, 渡邊 峻

医学部 安藤千春

基本医学語学教育部門 坂口美知子

【初めに】9月8日~9月22日まで California 州 City of Hope における研修を通して「患者中心主義」という概念について学ぶ機会を得た。日本においても患者中心の医療が確立されつつあるが, そのシステムはいまだ発展途上である。City of Hope では「患者中心主義」を具現化した Patient Navigator が活躍していた。彼らの役割と活動について以下に紹介する。

【Patient-Centered Philosophy について】まず City of Hope のスローガンに “There is no curing the body, if in the process, we destroy the soul.” というものがある。City of Hope では, 患者中心の精神をモットーに医療を実践しており, Supportive Care Medicine Team として, 様々な職種がその任務にあたっている。しかし闘病中の患者や家族側がニーズに合ったサポートを受けられる職種と, 直接コンタクトすることは容易なことではない。そこで双方の間に立つのが Patient Navigator で, 彼らは患者に対して City of Hope のシステムについて説明し, 患者の要望に合わせて必要な職種・部署を紹介する役目を担う。そこで, 患者と医療者側の壁を取り除けるよう双方の意志疎通はかり, 患者とその家族が治療について理解できるようにサポートするのである。また, Support Screen という, iPad を使用したスクリーニングデバイスを用いて, 患者側からの積極的な情報発信を可能にするシステムも開発されている。

【考察】City of Hope では, Patient Navigator や Support Screen 等があることで, 患者主体の情報発信を促進し, その結果, 的確な医療従事者や, 医療機関への紹介が可能となっている。また, Patient Navigator の患者に対するきめ細かい対応のおかげで, 精神面のケアも行き届き, 文化・言語の障壁を取り除いて, 治療効果の向上に貢献している。私たちは今回の研修で, 「患者中心主義」の最終的な目的は, 患者やその家族の自立を促し, Quality of Life を高く維持しながら病気と共存する精神と生活基盤を確立する手助けをすることである, という新たな学びを得た。今後医療に従事していく者として今回得た知識を活用し, 日本の現状にあわせて改変した医療システムの導入と発展に, 微力ながら尽力していきたいと考えている。